

かれ、海のわにを
あざむきつて言ひしく、



「あれ吾と汝と、なむちくらべて、
うがら族の多さ少なさを
計らむとおもふ。





かれ、汝^{なむち}は、
その族^{うがら}のありのまにまに、
ことごとく率^みて来て、

この島より
気多けたの前さきにいたるまで、
みな列なみふしわたれ。」





吾、^{あれ}その上をふみ、

読みわたり来て、

今地^{つち}に下りむとする時に、

吾^あがい^{なむち}はく、
「汝^{あれ}は、我にあざむかえぬ。」
と言ひをはるに、





すなはち

最も^{もと}はしにふせりしわに、

我^{あれ}をとらへて、

こつこつとく
我が^あ衣服^{ころも}をはぎき。



汝なむちがせまくは、
この海塩うしほを浴あみ、
風のふくに当たりて、
高き山の尾上せのへにふせれ。

なむち
汝がせまくは、
うしほ
この海塩を浴み、



風のふくに当たりて、
高き山の尾上おしにふせれ。



今すむやけく

この水門みなとにゆき、

水みづをもちて

汝なむちが身みを洗あらひて、

すなはち

その水門みなとの蒲黄かまのはなを取り、

しき散ちらして

その上にこいまるばば、

汝なむちが身、

もとのはだのごとく

必かならずいえむ。

今すむやけく

この水門みなとにゆき、水を

もちてなむち汝が身を洗あらひて、

すなはち

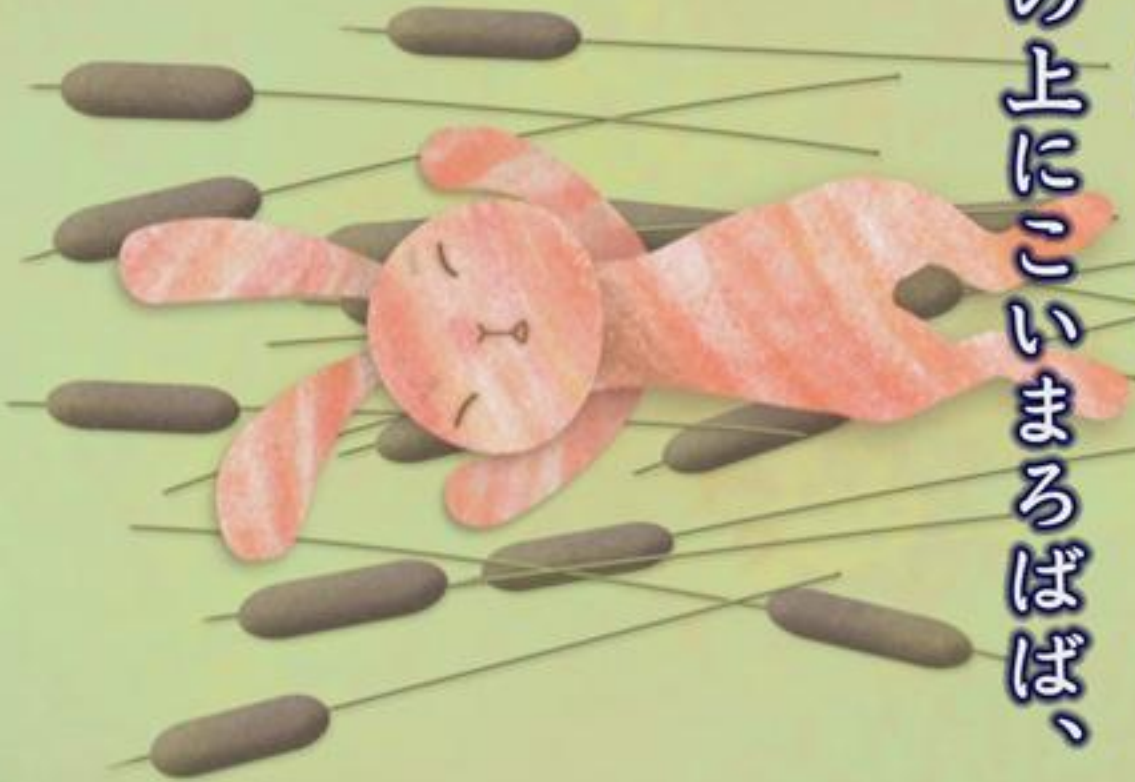
みなど

その水門の蒲黄を取り、

かまのはな

しき散^ちらして

その上にこいまるばば、



なむち
汝が身、

もとのはだのごとく

かなら
必ずいえむ。

